



ひとう



海援隊旗(二色きの旗)

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/>

新年のご挨拶

新年明けまして

おめでと〜うございませう。

龍馬記念館にとっては、特別の年明けとなりました。指定管理者制度実施の中で、初めての「公募」の波をくぐらなければならなかったからです。12月3日、手続き最後の公開ヒヤリングも終わり、後は結果を待つのみです。まだ、この号で結果をお知らせすることはできません。ただ、4月までは現体制です。予定通りのスケジュールをきっちりこなすだけです。

いずれにしても、龍馬記念館を巡る環境はより厳しいものになるでしょう。入館者を増やしながらか、文化度を高めたい、これが基本姿勢です。考えようによれば互いに反比例するような目的だと言えないでしょうか。それだけに、頭を捻らねばなりません。そんな事態の練習の意味も込めて平成19年12月17日(月)からの「幕末写真館」展では、従来の企画展とはいささか異なる手法で組み立ててみました。

幕末15年間を、古写真を使って表現しようとするものです。ペリー来航に始まる日本の夜明けから明治維新までを、時代を象徴するような事件にスポ

指定管理者制度・「公募の波」の中で

「幕末写真館」展は古写真を土佐和紙で

表現手法を変えて

ットを当てながら追っていきます。写真技術は、幕末の緊急事態をきちんと記録にとどめる手段として伝わってきたのです。その古写真を土佐和紙に大きく引き伸ばしました。パネル処理して、キャプションもこれまでのような人物、時代の説明だけでなく、「イメージ」と題して、筆者に写真を見た印象を書いてもらいました。より写真を理解しやすくなります。

とにかく、館の2階全てが、写真館です。メイン通路は「幕末通り」と呼

び名をつけました。展示室は「龍馬スタジオ・暗室」と言ってください。そしてカメラマンはもちろん「龍馬」たちが多くでしょう。そんな方たちのこれまで知らなかった表情が見えるかも知れません。気軽に話しかけていただければと思います。企画展は3月20日(木)までです。

改めて、新年明けましておめでとうございます。

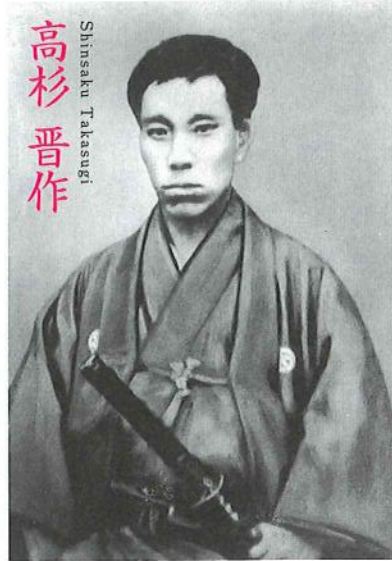
森 健志郎



「幕末写真館」展のポスター

古写真は個人も含めて全国約30箇所の歴史館などからお借りした。

誰もが新しい日本を夢見た時代であった。



高杉 晋作
Shinsaku Takasugi

長州藩士
騎兵隊を結成し、四ヶ国連合艦隊との講和談判。
国立国会図書館ホームページより



桂 小五郎
Kogoro Katsura

剣客・長州藩士・政治家
薩長同盟の締結、長州藩を主導し尊皇攘夷派の中心人物として活躍した。
国立国会図書館ホームページより



西郷 隆盛
Takamori Saigo

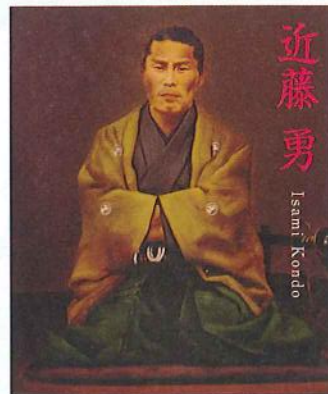
薩摩藩士・政治家・軍人・教育者
薩長同盟の締結、戊辰戦争の活躍など明治維新の指導者であった。
国立国会図書館ホームページより



新選組副長・幕臣
近藤勇局長の片腕、副長として活躍した。
土方歳三資料館所蔵
土方 歳三
Toshizo Hijikata



Hikoma Ueno and family
上野彦馬と家族
撮影者:上野彦馬 推定年:1869年
左から彦馬弟幸馬、牧なか、彦馬姉ちえ、母伊曾、妹この、牧元治郎、彦馬
学校法人産業能率大学 上野一郎氏所蔵



近藤 勇
Isami Kondō
新選組局長 幕臣
新選組局長として反幕府勢力の鎮圧に当たり、池田屋事件、禁門の変などで活躍。
町田市・小島資料館所蔵

合わせ鏡
撮影者・地域・年代不詳
日本髪のかい具合を、合わせ鏡でみている女性。いわゆる風俗写真である。右に化粧箱、左に月琴がある。
長崎大学付属図書館所蔵



洋装の男性
上野彦馬のアルバムによく登場するモデルあるいは門人の一人? 元治元年(1864)彦馬の野外スタジオ(長崎)で撮影されたもの。
長崎・江崎べっ甲店所蔵

「幕末写真館」展

幕末の顔がずらり勢ぞろい!

会期 2007年12月17日(月)~2008年3月20日(木)



後藤 象二郎
Syojiro Goto
土佐藩士 上野彦馬撮影 1860年
この肘をついている台は龍馬の写真でも同様の小道具である。
東京都・港区立港郷土資料館所蔵



坂本 龍馬
Ryoma Sakamoto
海援隊長 井上俊三撮影
焼き増しなど考えられなかった時代に、この写真は焼き増し可能な種板方式で撮られている。

幕末写真館、開展。
幕末の古写真が土佐和紙に!

「龍馬」が切り撮る幕末の瞬間

「幕末写真館」展がいよいよ始まりました。記念館2階に二歩足を踏み入れた瞬間そこにはもう幕末の風が吹いています。どこかで見かけたあの人が、そこにも、ここにも立っています。まずは「幕末通り」を歩いてみてください。素足の高杉晋作や、若き日の桂小五郎が、腰を掛けて座っています。微笑む中岡慎太郎には、近江屋辺りでの出会えるかもしれません。

彼らを写した写真屋さんなら、「幕末通り」北側の「龍馬スタジオ・暗室」をのぞいてみましょう。「東の蓮杖、西の彦馬」写真の開祖といわれた2人の偉業を目の当たりにすることが出来ます。下岡蓮杖は下田に生まれアメリカ人から写真を習得しました。今回は、蓮杖が使用していたカメラを下田開港博物館より拝借し、展示してあります。一方、上野彦馬は長崎生まれヨーロッパ人から写真を習得し、長崎に初めて写真場を開業しました。龍馬をはじめ多くの幕末の志士達がそこを訪れています。

さて、「幕末通り」海側の「海に見えるギャラリー」では、同じ場所のセットと小道具で写した可笑しい写真が大集合しています。

教科書で、それとも映像の中で見かけた幕末の顔たちが、土佐和紙に大きく引き伸ばされてよみがえります。そこから新たに見えてくるもの、あるいは伝わってくる何かを現代だからこそ素直に感じ、観頂ければ幸いです。

尚、この企画展では約30余りの博物館、資料館、図書館、個人の方々からご協力を得、貴重な写真資料のご提供を頂きました。

中村 昌代

四万十市、下田市などとの交流深まる

龍馬を見抜いていた男「樋口真吉」展を振り返って

「あなたは幕末の志士・樋口真吉を知っていますか？」という問いかけで開催した、「樋口真吉」展。実のところ、この人は生まれ故郷・四万十市でもほとんど知られていない人物でした。しかし、二ヶ月半の会期を経て、県下を中心に真吉のことが少しずつ知れ渡っていった手応えを感じています。

「土佐の中村にこんなスゴイ人がいたのか」「龍馬との接点を考えるとゾクゾクする」「幕末にはまだまだ知られていない人がたくさんいたのじゃないか」「歴史の醍醐味を感じた」。今までにない声を聞きました。武者者であり、文官として有能だった真吉の資料や人となりを紹介することで、新しい龍馬の側面にもスポットが当たったようです。

龍馬没後百四十年の今年、「坂竜飛騰」をキーワードにそういった企画展を開催できたのは、多くの方のご協力ご支援によるものです。

開催初日には、真吉のひ孫にあたる樋口文太郎氏（八八）が来館くださいました。文武両道の士で身長が一八〇cmもあった真吉を彷彿とさせる、背筋の伸びた長身と穏やかな物腰、等身

大の真吉パネルと並んだ姿が印象的でした。今回、四万十市立郷土資料館からお借りした資料は、この文太郎氏が昭和六〇年に寄贈されたものです。また、当館から初めて四万十市への歴史探訪バスツアーに出かけました。約四〇人の参加者と真吉ゆかりの地を回りました。

参加者の中には、樋口真吉を樋口一



樋口真吉パネルと並ぶ、ひ孫の樋口文太郎さん（当館で）



10月13日に開催した「龍馬と真吉をめぐるバスツアー」。夕部収一館長の説明を聞く参加者（四万十市立郷土資料館で）



文久3年(1863)1月に容堂と勝が謁見した間。容堂が使ったと言われる酒杯も展示している（静岡県下田市・宝福寺で）

葉の関係者だと思っていたという方もいましたが、一日の探訪が終わる頃には十六歳の龍馬が四万十川の改修工事に出かけ、二十歳年長の真吉との親交を深めていった様子がしっかりとイメージできたようです。（一葉とは全く関係ありません。念のため）

四万十川の河口にある下田砲台は真吉がつくったものですが、同じ地名を持つ静岡県下田市でも、今回の企画展をきっかけに龍馬研究や検証が始まりました。特に文久三年（一八六三）一月、勝海舟が山内容堂に龍馬脱藩赦免を請うた場所、下田市の宝福寺を中心とした活動には目を見張るものがあります。

宝福寺では「容堂と海舟、謁見の間」が当時のまま修復復元され、歴史研究家や市民らが龍馬の足跡を探求するなど、熱心な取り組みをしています。

四万十市の木戸吉通氏、北川村史談会、福岡県大牟田市の大石英一氏（大石神影流六代目）、海の科学館（琴平海洋会館）、神戸大学附属図書館など関係の皆様にも感謝申しあげます。

幕末はまだそこにあって、歴史のペールはそんなに厚くない。「樋口真吉」展を通じて、私自身が歴史の醍醐味に触れたような気がします。

主任 前田 由紀枝

幕末と写真(2)

写真と絵画



徳島大学名誉教授 渋谷 雅之

に長時間を要し、被写体の人物をカメラの前に座らせたまま、撮影者が十分ほど食事に出かけた、などという逸話も残っている。

実用化が進み、写真の応用範囲も十分に広がった。当時報道写真家として日本に滞在していたF・ベアトなど、外国人写真師の撮影目的は、報道目的の他は人類学の研究や、好奇心で写真を欲しがる外国人のための商業用である。密出国して英国で写真を撮った長

州藩士の写真などは撮る側の人類学的興味によるものだったと想像される。

幕末当時の撮影目的の他の一つは、名刺としての用途である。他人に自分を通ずるためには写真は最もリアルである。当時写真は貴重品であり、その大きさにより急激に高価になった。経済性と用途に見合うサイズが、現代の名刺の大きさに落ち着くのだが、それでも現代の一〜二万円というのが一枚の相場だった。まことに贅沢な名刺である。それらしい古写真が大量に現存しており、上野彦馬に師事する一方、土佐藩の探索方を務めていた井上俊三の作品にも、坂本龍馬を写したそれらしい写真がある。

幕末から明治初期にかけて、写真を

撮ると魂が吸い取られて早死にするとする迷信があり、これは庶民が初めて写真に接した下田あたりから始まったらしい。そのため一般庶民は撮影を嫌がったので、遊女に金銭を与えて無理矢理写真を撮らせた記録がある。撮影目的は米国大統領への土産とするためだったらしい。幕末にかけても外国人に遊女の写真の需要が多く、それらしい写真が大量に現存している。これらの写真に写った遊女達の表情に暗さはない。写真はまだ彼女らの悲しみや苦しみを映し出すほどには高度化されていなかった。

庶民以外では高級武士や志士の写真が多く残されている。例外的に西郷隆盛が一枚の写真も残さなかったのは大きな謎である。引用した中岡慎太郎の写真は大坂の堀与兵衛の作品とされている。武士が笑った写真を記録に残すなど想像を絶するのだが、それよりも数秒間笑い続けるなどは、大した根性と思わざるを得ない。なお、頬に当てられた手は削り取られた遊女のものだと推測されている。

ヨーロッパで写真が発明された後、絵画の世界で反発が生まれ印象派などの形而上的画法が勃興する。もともと主観的な表現をむねとする日本の芸術界は、写真にもその属性を取り入れながら発達してゆくのである。 〓完〓

小さな穴を通して屋外から射し込む光が反転した映像を結ぶことは、古来人類が経験していた。ヨーロッパでその原理を器械化したのが「カメラオプスキュラ」である。この器械を多くの画家達がアッサンのために用いた。やがてその情報を固定したいという欲求から写真術が発達するのである。

前号(1)で述べたように、初期の写真機では約八時間の撮影時間を要したが、銀板写真の時代になると約二十分になり、何とか人物像が撮れるようになる。

二十分間身動きせずに写真を撮るなど、現代人の我々には想像できないが、当時の人々にそれほどの抵抗感があったとは思えない。絵画のモデルになるよりはよほど短いのである。上野彦馬たちが湿板写真を撮った幕末には露光時間は十秒以下まで短縮された。ただし、明かりの乏しい夕暮れなどには、さら



中岡慎太郎（北川村立中岡慎太郎館提供）

拝啓龍馬殿

106通



9月21日～12月20日

この海はデカイね。細い目こらしてよく見れたものです。エヘン、エヘン、また来ます。
(11月24日 愛知県 S・T 24歳 男性)

お初にお目にかかります。友人から悩んでいるときに「幕末の志士を読めよ！胸が熱くなるぞ」と勧められて「龍馬がゆく」を読みました。全巻おもしろくて、とても勇気づけられた気がします。それから、いつか土佐へと想い続けて念願がかないました。桂浜にて遠き果てしなくづく海をながめて気持ちを大きく今の自分を少しでも変えることが出来たらと。今日一日楽しんで帰ります。
(11月18日 高槻市 Y・K 42歳 男性)

140年と20日後ですが、今日訪れるまで命日は知りませんでした。きっとあなたは生まれ変わって日本のために働いているでしょう。頑張って、私もまだまだ頑張ります。
(11月17日 大阪府 K・N 50歳 男性)

何年前にここに来たかおぼえていません。この夏に「拝啓龍馬殿」が本になり、その中で私の一筆を載せてもいいです。かとの八ガキを戴き、これは龍馬さんが呼んでいると想い、来ました。140年経った現在はまだいい世の中ではありません。きつがっかりするでしょう。でも夢を持って走り続けている人もいます。私もその一人です。5月に病気をしてもうダメかとも思いましたが、元気になりました。どうか皆がいい方向へいくように見守っててください。私を桂浜へ呼んでくれてありがとう。まだまだ走り続けます！
(11月17日 大阪市 F・M 42歳 女性)

龍馬の生き様が好きで、当坂本龍馬記念館を訪れるのも3度目で、今度は家族・友人と一緒に来たので、ゆっくり見ることが出来ず、今回はビデオも最初から最後まで見れ、今迄読んできた龍馬の本が凝縮され、感銘しました。考えてからの行動の素早さと、人を引きつける魅力、そしてせまい土佐の国でなく、日本でもなく、世界に目を向けた行動、本当に人にマネの出来るものではないです。自分も龍馬の様な考え、行動力を持つ人間に少し

でも近づけたらと思っております。
(11月17日 岐阜県 H・H 54歳 男性)

私は、今年突然坂本龍馬さんに目覚め、龍馬さんをおいかけしています。今、龍馬さんは日本へどんな手紙を向けてくれますか？そんな事を考えております。どうか、私に伝えていただけませんか？宜しくお願い致します。
(11月14日 長野県 T・K 32歳 男性)

龍馬の思いは、自分も通じたと思えました。さっちようどうめいとかいような事を龍馬がおこしたのものはものすごーいと思えました。龍馬の思い、みんな平等はなかなかむずかしいのにそれをゆめにがんばったりようまはず

ごいなあーと思えました。
(11月14日 香川県 H・I 12歳 男子)

龍馬先生、こんにちは。去年の今日、記念館に来て以来なので久しぶりに龍馬先生に会いに来ました。去年、一緒に来たのは、龍馬先生をきっかけに仲良くなった知人でしたが、今ではその知人が私の大切な人になりました。二人で「龍馬先生がきつかけやね」とよく話しています。私も彼も龍馬先生のことを尊敬していて、何かあると「龍馬先生やったらどないするやろ？」と考えたりします。あなたの生き方に考え方に、その優しさに、つくづく自分の小ささに気付きますが、あなたのことをもっと感じて、大きな人間になりたいです。龍馬先生がくれたこのきつかけも大事に、彼とまたこの記念館に来るきね！
(11月3日 大阪市 M・K 26歳 女性)

こんにちは。私は歴史上の人物で一番龍馬さんが好きです。土佐(高知)出身というのもそうだし、一番の理由は平和主義というところです。今の時代、世界各国で戦争がくりひろげられています。たくさんのおとうい命がなくなり、たくさんの方に傷をつけています。今の現場を龍馬さんが見たらどうでしょう。人が人を殺めることは本当に悲しく、つらいことだと私は思いました。
(10月31日 高知市 M・U 12歳 女子)

お元気ですか？ボクはなんとかが元気で。今年で

30才になります。就職も決まり、新たな人生の旅立ちの前に龍馬さんのパワーをちよっとだけ借りて来ました。いつか愛する人と一緒に来た時にお返しします。では、また、いつか...
(10月29日 広島市 M・T 30歳 男性)

今年、最愛の母親が亡くなってしまいました。龍馬さん、あなたの母も強かったでしょう。俺の母親も強かったよ。笑。今はあなた同様、こわい姉上に日夜はげまされたりして頑張っている毎日です。母は強し、姉弟っていいね。
(10月20日 岡山市 T・M 48歳 男性)

土佐の星・坂本龍馬は33才という若さで亡くなってしまい、すぐ早くてびっくりしました。りょうまの姿はいつも前を真つすくみでいてたくましいと思えます。ころされ方とかとてもさんごくで昔の人はひどいなと思う。けれど、昔はそういう中で生きていたのでそんけいします。天国でお幸せに...
(10月19日 高知市 N・K 12歳 女子)

新婚旅行で高知に来ました。夫婦で龍馬殿が大好きで本を集めたりしています。夢の高知旅行最高です。
(10月10日 滋賀県 R・S 29歳 女性)

再びあなたに会いに参りました。新婚旅行で夫に連れられ、あなたに会いに初めてこの地を訪れてから25年、今日は

は銀婚式です。新婚旅行で「ぼくの女房、辛子です」と、突然あなたに紹介されて、ごあいさつ致しましたネ。それから25年、たくさん時間と、たくさん心を揺らし生きて参りました。息子達(涼介、駿平)もそれぞれあなたの名前をいただいて、夫とこの地を訪れて...。そして今日...、涙の出る想いで、あなたと海で再会です。あなたの様に偉大には、あなたの様に日本を動かす大物には到底なれませんけれど、あなたの様に優しく、あなたの様に強く、あなたの様に志高く生きてきたつもりです。今の幸福はあなたと共にあったように思います。ありがとう。ありがとう。ありがとう。これからも今までも通り生きてゆくつもりです。あなたに会えたこと、あなたに今日また会えたことに感謝しつつ...。
(9月22日 東京都 S・K 女性)

*** 編集者より ***

9月末からの3ヶ月間は、小学校の遠足、龍馬の誕生日・命日などがあり、たくさんの方にご来館いただきました。子どもたちからのメッセージを見ると、今の日本・世界の状況を子どもたちなりに考えて、平和な世の中になってほしいと願っているのが伝わってきました。記念館を見学して、少しでも龍馬に、歴史に興味を持った子どもたちの中から、第2の龍馬が現われてくれるような気がします。

ここは館長の部屋 森 健志郎

「拝啓龍馬殿」を出版
今年、館の大きな仕事に「拝啓龍馬殿」の出版がある。昨年の夏場から作業に取り掛かっている。開館以来15年で、ストックされた入館者の皆さんの龍馬へのメッセージが12000通を超えた。喜びも、悲しみも、苦しみも...ひっきりぬめての12000通である。龍馬に問いかけ、共に語り、相談する。天国で無言のはずの龍馬が、不思議なことにそれぞれの心に返答をし、道を教えている。まるで生きていくかのように。
最初にこのメッセージを読んだ時、ホッと安堵感を覚えた記憶がある。皆さん実に真っ直ぐな気持ちを吐露していると感じた。向かい合った人をそんな気持ちにさせる龍馬の魅力が改めて考えさせられた。同時に「悩みなき人生なんてないんだ。誰もが多少の差はあれ悩みを抱えている」ごく当たり前のことだが、現実に見せられて変に説得力があったのも事実である。連帯意識が働いたのかもしれない。急に、元気が出てきた。元気が出るも勇気もわいてきた。引きずっている難題にもう一度挑戦してやろうという気になった。
それが、本にしよう...と思いついた動機である。選ばせていただいた2500通の皆さんに、名前掲載の可否と近況を尋ねる往復葉書を出した。古い方は住所変更で分からない場合が多かった。約1000通のご返事があった。ほとんどの方が「掲載OK」であった。そういえばこの数ヶ月、郵便配達さんを毎日待っていた。見えない時には、郵便受けまでのぞきに行ったものである。皆さんのご返事が楽しみにしていた。読ましていただけで活力をもらった。本には歌舞伎俳優の染五郎さん、舞台俳優の上川隆也さん、共に「龍馬適役」のメッセージも約束済みである。今年の夏、きっと日本国中に「龍馬の風」が吹く。

龍馬検定実施のお知らせ

数年前から全国的に検定がブームになっている。当館にも龍馬検定を作ってくれないかという声をいくつか頂いており、検討を重ねてきた。龍馬という人は、常に最先端の物に興味を示していた。そのため、当館ではインターネットを使って検定を行う方法を模索してきた。自宅にいながら「龍馬大事典」などを片手に検定へ参加できるのだ。
当館は常々、「これからの日本を支えていく若者に龍馬のことをぜひ知っていただきたい」と考えてきた。検定という方法は楽しみながら龍馬を学べる良い方法だと思うが、ご当地に向いて受験する方式は、学校や仕事をしている世代には制約がありすぎる。そこで当館では、インターネットを利用して全国どこからでも気楽に参加できる検定を開催する。忙しく東奔西走した龍馬が現代に生きていれば、インターネットを活用しないはずがない。龍馬の検定にこれほど相応しい方法はないだろう。若者だけでなく、司馬遼太郎の『龍馬がゆく』よりも前から龍馬ファンだ、という方もぜひ挑戦してほしい。
まず、四月に初級の体験版を立ち上げる予定。そして本格的には、夏に初級・中級を開設し、上級を十一月に開設する。初級は、四月の体験版は勿論、夏に開設するものも無料で、あまり詳しくない方でも楽しめるもの。中級は有料で、龍馬や幕末に対してある程度の知識を必要とするもの。その中級で合格点を取った人だけが、十一月の上級を受験する資格が得られる。上級に合格した人には、龍馬記念館の永久無料入館資格の認定など、様々な特典を考えている。
龍馬は人気の高い歴史上の人物であるが故に、創作された話が非常に多い。それを真実だと誤解している方も多く、これを機会にぜひ多くの方に龍馬の真実を知って頂きたい。上級の中には、高知や長崎、下関、京都などへ実際に足を運んだことがないと難しい問題も含まれるが、熱心な龍馬ファンなら問題ないだろう。
今から十一月の上級検定に向けて備えをしてほしい。こちらにも簡単には満点が取れないような、龍馬ファンの欲求を満たせる問題を考えている。
乞うご期待！



坂本家当主・坂本登氏を迎えて

前号でも紹介したが、今年九月、龍馬が暗殺された近江屋が当館に復元された。中へ入ることもできる体験型の展示物で、来館者から大変好評だ。近江屋は、龍馬と慎太郎がこれからの日本について話し合った最後の場所なので、たんなる展示物ではなく、様々なことをテーマに対談を行う場として、これから活用していく。

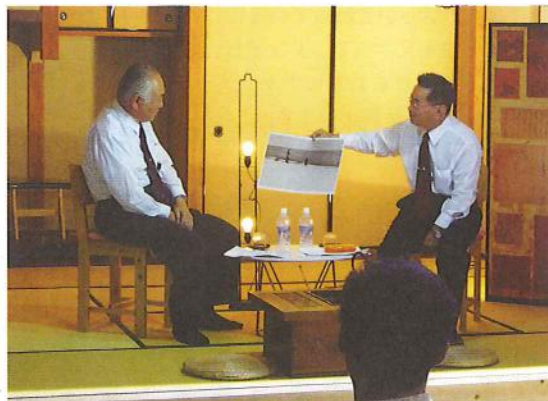
記念すべき第一回目は、十一月十五日に坂本家当主・坂本登氏を招いて、当館館長と対談していただいた。龍馬が暗殺されて一四〇年目のこの日に最も相応しい対談だった。

龍馬や甥の直寛、その孫の直行は、皆普段は無口だったそうだが、登さんも同じような雰囲気を持っていた。登さんは、龍馬への思いや父・直行について静かに語られた。

登さんが対談前に来館された時には、丁度学芸員たちが小学生を案内しており、その小学生に対して、「ここで龍馬の精神を学んで、第二・第三の龍馬になってください」と言葉を掛けていただいた。それまで静かに説明を聞いていた小学生も目を輝かせて興奮した様子だった。

第二回目は十二月二十二日に、元徳

島大学副学長の渋谷雅之氏を招いた写真談議。
今後毎月一回開催。定員は毎回三十名。十七時三十分から。



左が坂本登さん・右は森館長

『坊っちゃん劇場』で来春からミュージカル「龍馬!」上演 主役の上野哲也さん来館

抜けるような青空が広がる秋の日に、さわやかな風が降り立った。そんな形容がピッタリの俳優、上野哲也さん(二六)が来館した。来春から一年間、『坊っちゃん劇場』(愛媛県東温市)でミュージカル「龍馬!」で主役を演じる。

『坊っちゃん劇場』は秋田県に拠点を置く劇団わらび座が主宰する劇場。どの作品にも劇団と俳優たちの情熱が感じられ、観る人を勇気づけている。

初めて高知に来たという上野さんは「ここに来て龍馬という人を本当に実感できました。この青空のような龍馬を演じたい」と熱いまなざしで語った。

ジェームス三木作・演出で主役の龍馬はタップダンスを踊り、お龍はフラメンコを披露する。龍馬は歌って踊ってどんなメッセージを私たちにくれるのか。十月末から十一月初旬には高知公演も開催する。楽しみな一年が始まりそうだ。



暗殺日の「龍馬の気持ち」で床の間の前に座る上野さん＝記念館二階「近江屋」で

入館状況

2007年12月20日現在(開館以来5,866日)
◆総入館者数 2,099,812人
◆2007年度最多入館 5月4日 2,707人
2007年度最少入館 12月19日 50人
2007年度1日平均入館者数 363人
◇最多入館 1993.5.3 3,700人
◇最少入館 2004.10.20(台風のため) 8人

編集後記

もう年末か! 忘年会も企画展「幕末写真館」展が師走半ばのスタートになったことで、新年会へと持ち越された。とにかく去年は指定管理者制度の公募問題が、重くのしかかっていた。ただ、龍馬は今年、ミュージカル、オペラ、出版「拝啓龍馬殿」と企画が続く。龍馬の年になりそうである。そんな予感がする。それにしても「樋口真吉展」の目玉展示物であった、左行秀作、真吉の長刀の白い輝きが、なぜかまだ目の奥にある。(モ)

館だより「飛騰」第64号(年4回発行) 表紙題字: 書家 沢田 明子 氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830
発行日 2008(平成20)年1月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
発行 高知県立坂本龍馬記念館 http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~ryoma/
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休
入館料 一般400円・高校生以下無料
(3月20日まで/一般500円・企画展のため)

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください